

開拓大判官から 農夫へ



▲アイヌの伝統的な衣服「アツシ」

「松本十郎」という名前に聞き覚えはありますか？北海道の歴史について調べると、必ず出てくる人物の一人です。

庄内藩士・戸田家の長男として生まれ、幼名は重松。その後は惣十郎と名乗りました。庄内藩士として過ごし、戊辰戦争時には朝敵藩士として活躍するも敗北し、「松本十郎」と名を変えました。

その後、開拓判官となると、根室において漁家・漁民の活発化を図ったほか、根室を東京府に移管する際には職を賭して反対したことが知られます。

また、アイヌの人々とも分け隔てなく接し、アイヌの「アツシ」を着用しては管内を巡視し、地域の発展に寄与したため、「アツシ判官」と呼ばれ、慕われたとも言われます。



▲松本十郎の書

明治6（1873）年には大判官となり、開拓使の財政再建に大きく貢献した松本十郎ですが、明治8（1875）年には樺太アイヌの強制移住に関して、当時の開拓使長官であった黒田清隆への説得を試みるも失敗し、最終的には辞任しました。

開拓使を辞した後は庄内（現在の山形県鶴岡市）に戻り、自身を農夫と称して土地を耕すなどして生涯を送ったとされます。

碑の撰文や読書をたしなんだほか、多数の著書を残したことも知られ、石狩にも掛け軸が残されています。写真は、はまます郷土資料館で保管されている「松本十郎の書」です。令和元（2019）年度に表装を修復し、現在の姿になりました。

書には「吉祥善事大漁豊歳 庚子三季 ■陽農夫松本十郎」（■部分は現時点で未解読）と書かれています。現在でも使われる言葉ですが、あえて訳をつけるならば「大漁、豊かな年というのはこの上なくめでたいことだ」といったところでしょうか。「庚子」とあるので、明治33（1900）年に書かれたものだと分かります。この書がどういった経緯で浜益にやって来たのか定かではありませんが、明治33年というところから、明治33年とちやうど浜益の漁業が栄え、ピークを迎えた頃ですから、その感動を形にして残したものでしょう。

「藩士」から「大判官」、「農夫」とさまざまな立場へと変わっていった松本十郎。こうした短い文に、どのような思いが込められているのでしょうか。

（坂本恵衣）

石狩市学芸員
坂本恵衣 Kei Sakamoto

専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史的変遷などを研究する。